



振り返るための大切な時間

児童玄関前に掲示されたクリスマスツリーに、靴下や雪だるまなどの形をした紙がたくさん貼られています。貼られているのは、友達のいいところや自分のがんばったことなどが書かれた“いいところ飾り”。「いろんなことにチャレンジできた。」「6年生がやさしくしてくれた。」「算数のわからないところを教えてくれた。」「そうじ、役わり分たんしてきれいにできた」などの言葉が並んでいました。

書記局が呼びかけてくれたこの取組。クリスマスツリーが貼られた初日は“飾り”はそんなに増えませんでしたでしたが、2日目ぐらいからちらほらと“いいところ”の書かれた用紙が貼り出されたかと思うと、ツリーの緑色の台紙は次々と色とりどりの“いいところ”のカードで飾られていきました。きっとふつうのことだと感じていたことが、他の誰かが書いているのを見て“いいところ”だったのだと気づくきっかけになったこともあるのでしょうか。いいところが相まって広がっていくようでした。

相まって広がるといえば、先日のぞいた1年生の道徳の時間では、“ええところ”という読み物を通して優しさについて考えた後、互いのいいところを付箋に書いて渡し合う活動を行っていました。付箋を配られるとすぐに書き始める子もいるかと思うと、考え込んでしまう子もいます。また、自分にはいいところなんかないと口に出す子もいます。けれども活動が進み、机や椅子の後ろに貼られた付箋に書かれた自分のいいところのメッセージを見たときはとても嬉しそうです。パチパチと手を叩く子や、やったー！と嬉しそうに手を掲げる子どももいます。時間が経つにつれ、優しい空気が教室を包みこみ付箋を書くのが止まらなくチャイムが鳴ってしまうほどでした。そんな様子を見てみると、いいところって人に見つけてもらいながら自分自身のものにしていくものかも知れないなあと思いました。

いいところを自分自身のものにしていくことにより自尊感情も育まれていくように思います。今月道徳教育の充実及び地域の特色を生かした「北海道ならではの道徳教育」を推進することを目的に本校を会場にして開催された「根室管内道徳教育推進研修」。授業公開、郷里里砂さんのビデオレター、シンポジウムの3部構成で子どもたちの自尊感情について考えることをテーマに行われました。大勢のお客さんの前で物おじせずいつも通り発言していた2年生たちの姿は学級の支持的な風土があってこそだと感じますし、オリンピックのような大舞台に立てた原動力は家族や仲間、地域の人たちの支えがあったからと話されていた郷選手の言葉。そして地域、学校、行政それぞれの立場から語られる子どもたちの今と未来を支えていこうという思い。研修会を通して、人と人との支え合いやつながりが生み出す可能性についてあらためて感じることができました。

ふだん、思っても口に出して伝えられなかった気持ち。頑張ったことにえっへんと胸を張れなかった思い。そんな胸の内も、ふとしたきつかけで言葉に出せる^{おもて}ことがあります。たとえば、いいところ飾りのツリーを前にして…。たとえば道徳の時間に付箋を手にしたとき…。そんなときこそ少し立ち止まって誰かについて考えてみる、自分のことを振り返ってみる、それはとても大切な時間だと感じます。ひょっとしたら、いいところを感じ取ることにも経験や練習が必要なのかも知れません。

廊下の窓ガラスに華を咲かせる窓霜。うっすらと積もった雪に残る足跡や大の字。年の瀬を迎え、厳しさを増す冷え込み。どうぞお体にご留意いただければと存じます。良いお年をお迎えください。